



編者●古谷知新 第三卷

# 江戸時代女流文学全集

日本図書センター

江戸時代女流文学全集

昭和54年11月15日 印刷

昭和54年11月30日 発行

編 者 古谷 知新

発行者 高野 義夫

印刷所 株式会社 誠進社

発行所 株式会社 日本図書センター

東京都文京区大塚 3-4-13

電話 (03) 947-9387

振替東京 2-8206

---

落丁・乱丁本はおとりかえします。

# 女流文學全集 第三卷 目錄

|           |       |         |
|-----------|-------|---------|
| 伊香保記      | ..... | 一一三     |
| 初午の日記     | ..... | 一一三—一〇一 |
| 後午の日記     | ..... | 一〇三—一三四 |
| 五葉        | ..... | 一三五—二〇四 |
| 卷之一       | ..... | 一三七     |
| 卷之二       | ..... | 一五〇     |
| 卷之三       | ..... | 一六三     |
| 卷之四       | ..... | 一七五     |
| 卷之五       | ..... | 一八九     |
| 庚子道の記     | ..... | 二〇五—二二六 |
| 桃の園生      | ..... | 二二七—二四四 |
| 上卷        | ..... | 二二七     |
| 下卷        | ..... | 二三一     |
| 奥の荒海      | ..... | 二四五—二七四 |
| 藻屑        | ..... | 二七五—三〇〇 |
| 伊香保の道ゆきぶり | ..... | 三〇一—三三四 |

ゆきかひ・・・・・・・・・・・・・・・・三三五—三四六

涼月遺草・・・・・・・・・・・・・・・・三三七—三六四

上巻・・・・・・・・・・・・・・・・三三七  
下巻・・・・・・・・・・・・・・・・三五九

旅の命毛・・・・・・・・・・・・・・・・三六五—四〇八

以曾都堂比・・・・・・・・・・・・・・・・四〇九—四三二

奥州波奈志・・・・・・・・・・・・・・・・四三三—四六六

狐とり彌左衛門・・・・・・・・四四三  
上遠野伊豆・・・・・・・・四四六

宮城野の狐・・・・・・・・四四六  
砂三十郎・・・・・・・・四四八

白鷺・・・・・・・・四四九  
澤江忠太夫・・・・・・・・四五〇

七ヶ濱・・・・・・・・四三〇  
四倉龍燈・・・・・・・・四五二

熊取嶺にとられし事・・・・・・・・四三三  
龍燈のこと・・・・・・・・四五三

三郎次・・・・・・・・四三四  
狐火・・・・・・・・四五四

大熊・・・・・・・・四三四  
影の病・・・・・・・・四五五

かつば神・・・・・・・・四三五  
高尾が事・・・・・・・・四五五

柳町山伏・・・・・・・・四三六  
狼打・・・・・・・・四五六

乙二・・・・・・・・四三八  
與四郎・・・・・・・・四五七

てんま町・・・・・・・・四四一  
佐藤浦之助・・・・・・・・四六〇

猫にとられし盗人・・・・・・・・四四二  
丸山・・・・・・・・四六二

めいしん・・・・・・・・四四三

上京日記……………四六七—五〇二

夢かぞへ……………五〇三—六〇九

女流文集……………六〇九—六七二

|                   |               |                                |               |
|-------------------|---------------|--------------------------------|---------------|
| 瀬川采女におくる文……………    | 小野菊子……………六〇九  | 難波に行く人をおくる……………                | 聴殿餘野子……………六三九 |
| 夫に贈る文……………        | 木村重成室……………六二二 | 殘菊を翫ぶ詞……………                    | 同……………六四〇     |
| 喜藤左衛門に送る文……………    | 小野阿通……………六二二  | 隅田川に船を浮めて月見る夜人々歌よみける詞……………     | 同……………六四一     |
| 息女に遺す……………        | ほうせう院……………六三  | 東慶大人の祭のをり……………                 | 土岐筑波子……………六四二 |
| 堀半左衛門におくる文……………   | 堀ろく子……………六九   | 氣屋久右衛門に送る文……………                | きせ子……………六四三   |
| たつ女におくる文……………     | 咬嚙吧春子……………六二  | 存義に與ふ……………                     | 馬場存義母……………六四六 |
| 千里におくる……………       | 遊女高尾……………六七   | 七月の記……………                      | 藤屋某女……………六四六  |
| 雛鶴におくる……………       | 遊女瀬川……………六七   | 紅梅をめづる詞……………                   | 荷田蒼生子……………六五五 |
| 廣澤記……………          | 遊女大橋……………六八   | 千隆につかはす……………                   | 同……………六五六     |
| 遊女の畫賛……………        | 同……………六三      | 歌の判の奥にける詞……………                 | 同……………六五八     |
| 遺書……………           | 原總右衛門母……………六三 | 初雁を待つ詞……………                    | 同……………六五九     |
| 一峰におくる……………       | 祇園百合……………六三   | 御風が歌と白菊の花一本持來りしに引かへて書きたる詞…………… | 同……………六六〇     |
| 年滿の賀序……………        | 堀江みえ女……………六三  | 縫子の許へ……………                     | 同……………六六一     |
| 年滿の賀跋……………        | 長谷川拾子……………六三  | をちの大徳の一週忌に……………                | 同……………六六一     |
| 母への書置……………        | 岡本美地……………六五   | 政弼君をいたむ……………                   | 同……………六六三     |
| 机の記……………          | 鶴殿餘野子……………六七  |                                |               |
| 山寺に詣てて紅葉を見る詞…………… | 同……………六八      |                                |               |

目 録

|                  |            |     |
|------------------|------------|-----|
| 釋瓦昌大徳の家の集の序…………… | 荷田蒼生子…………… | 六六四 |
| 消息……………          | 同 人……………   | 六六四 |
| うまきに送る文……………     | 清 女……………   | 六六五 |
| 許嫁の夫に……………       | 松尾政子……………  | 六六六 |

四

|              |            |     |
|--------------|------------|-----|
| ある人に贈る文…………… | 三宅融子……………  | 六六七 |
| 遺書……………      | 山口藤子……………  | 六六七 |
| 始見山花詞……………   | 阿 實 尼…………… | 六六八 |
| 馬場文英に送る…………… | 望 東 尼…………… | 六六九 |

女流文學全集第三卷目録終

# 女流文學全集 第三卷

## 伊香保記

いかほといふ所の出湯たづねて行きし人有りけり。山里の面白かりつる事ども、歸來りて語りければ、いかで見ばやと、所のさまもゆかしう、かつは武藏野の千種の花も見まほしう覺えて、秋の半の比ほひ、まだ有明の月も残れるに、露とともに起出て行きけり。秋のはてなしと聞きしもことわりしるく、はるばると野を分け行けば、桔梗・かるかや・女郎花・りうたん・はな薄・名もしらぬ草までも、花ならぬはなかりければ、面白さいはんかたなし。人々、

むつまじき花のにはひを身にふれて分くるはうれし武藏野の原

秋待ちて花にため行く武藏野はかぎりなきしもうれしかりはり

語りなば我もかうとやいひなまはなをみなへし華のいろく

歌のよしあしわきまへ知らぬ心にも、何れも言葉といこほり、よろしとも聞えず。まいて末の歌はか

りな遣のをろくしさも侍れど、さるはこゑの通へる方に、又見ゆるしも侍れとよ。日もかたぶけば浦和の里に立入りて、一夜をなん明しける。ついぢの上より木深き林つゞき見えて、物凄き山鳩の聲も、夕の哀をしらせ顔なり。ならはぬ旅なれば苦しく覺えて、枕引よせより臥して詠むれば、ふりたる木立のすいしげに並び立てるうちよりも、日ぐらしはなやかに啼出でたるにぞ、露けきむぐらの宿ながら、すこし心もとまりける。

露むすぶ草のまぐらのわびしさを忘るばかりのひぐらしのこゑ軒近き松の枝にぬぎかけし蟬のきぬを、人々めづらしとて取りこあそびける。折しもこたかく蟬のみみと鳴出でければ、

かけおきし此からぎぬのぬしとへばわれぞと名のる蟬の聲なぐれわたるまゝに、山の端しらぬこのまより、いざよひの月さやかに出て、面白き夜の氣色なるに、昨日の空の名残といひ、所からいま一しほにて、ながめつゝ、めであかぬ若きどちの、

さらぬだにあかぬ千種の花にまたひかりをそふるあきの夜の月我もおなじ事まねびいはむとて、

袖にうつる野邊の千ぐさの花の香にかさねてやどる夜半の月影ながむれば心のはてもなかりけり山の端しらぬむさし野のつき

あくれば浦和をたどり出て、又武藏野を分行きて、桶川といふ所に、晝のやすみとりけるに、家のうたてげなるだにあるを、疊やうの物までも、ふるめきたれば、これにはいかでとて、やどり替へんと人聞ゆれば、あるじわびて強ひてとむれば、とまりてある人、

むさしとてそこぬけ通るを川にしばしといむる宿はうるさし

さて行く程に、鴻巣といふ所になりぬ。しやうくわん寺といふ寺は、音に聞えたる事なれば、参らまほしう覺えけれども、この上人はいなのといふ人の弟にておはするよし、うち／＼聞けば、いかならんと心おき思ひけるに、折ふし外へおはして、留主のよしいへば、心安くて立寄りつ。此頃兄君のたてなほされしとて、ふしなき檜をえりて、いときよげに作りみがかれたり。學問所のしるしませて、たれかれといふ名の書付あり。中尊には坐像の彌陀たゝせ給ふ。左右には脇士の木像おはします。御前しばしをがみて、人などのけて、寺中見めぐりければ、書院とおぼしき所に、いと美しくしつらひたる座敷あり。ちやうだいのくちには、あげまき結びかけ、床よりはじめ、格子の組様までも、いとたくみに、目とむばかりにしなせり。天井は組入に色々の草花をかき、ふち／＼には金物打ちたり。障子には玄宗と貴妃、昭陽宮にて花見たまひし所をかけり。いかなる繪師や書きたりけん、梨花一枝のよそほひ、太掖の芙蓉のまことの顔ばせも、かくこそとおぼゆるまで、うるはしくぞ書きなしける。次の座敷には、大師渡天せさせ給ひて、種々の奇特をみせ給ふところと、その外七賢がたぐひの、さ

まざまの唐繪どもをかきたり。其次は墨繪に花鳥をかけり。すこし引入たる所に又佛壇あり。常の方丈佛とみえて、りうさくの彌陀四五體たせ給ふ。その外淨土の曼陀羅並に、廿五の菩薩の伎樂歌詠の繪さうなどかけられたり。其きには繪はさのみならねども、こまかくかける屏風あり。よりに見れば長恨歌なり。驪山宮へ行幸ありて、梨園の弟子つらなりて、絲竹のしらべをととのへ、祕曲をつくし奏すれば、貴妃はたへなるすがたにて、花のたもとをひるがへし、霓裳羽衣を舞ひ給ふ所よりはじめ、漁陽の鞞鼓地を動して來る所、翠華搖々として行きてまたとまるけしき、夕殿に螢飛んで思悄然と、來し方を思召し出て、さびしき宮のうちに、つくくとながめさせ給ふ所などを、まことまことしう書きたり。扱本堂に立歸りて、はるくに見渡せば、祖師堂・鐘樓・經堂、その外ついで樓門までもきら／＼しく、庭には色々の植木、山は杉村たちて、梢には諸鳥とびかけり、念性念佛念法念僧とさへべるなる、極樂ゑしやうも思ひやられて、見るも聞くも御法にもるゝはなしと、面白うぞおぼえし。さて鴻巢をたち出て行く程に、やどり取るべき熊谷の里、今一里ばかりといふところに、はや日はくれにけり。これぞ人の沙汰する池の蓮など教ふれども、さだかに見えねば、

おもひやるこゝろまでこそ涼しけれ池のはちすの花のゆふつゆ

頃しも秋の半なれば、野もせにすだく蟲の聲々、所から猶めづらかにて、暮れずばいかで聞かましとおもしろうこそ覺えける。とかくすれば、かの里に着きて、加賀の中納言のおり上りさせ給ふ中や

どりとて、清きよげなる家いへにとまりつ。前ぜん裁ざいはちひさけれども、ふり殊こと更さらなる木きども栽うゑ、五色しきの石いしなど敷しきて、誠まことにも心こころあるさまなり。あるじが娘むすめとて、いと美うつくしき子の、まみ口くちつき愛あい敬きやうづきて、髪かみふりわけのほどなるが、白しろき衣きぬしどけなく着きなして、くちの方かたより走はしりもて來きたり。あづまの奥おくにもかく美うつくしきものもありけるかなとて、人々ひとびとあらそひて抱いだかんとすれども、いなとて寄よりも來こず。聲こゑを聞き知しらぬにこそとて、ある人ひとだみたるこわづきをかしうまねびて呼よびたるに、やがてなづきて抱いだかれける。今こ宵よは宿やども清きよげなれば、心こころ安やすくうちやすみけるが、旅たびのならひなれば、こゝもまた夜よをこめてたち出いける。熊くま谷がやの寺てらみちなれば立たち寄りけり。中ちゆう尊そんに春かすが日の御おん作さくの彌み陀たたせ給たまふ。げにも三さん十二じふに相さう八十はち種しゆ好かうとゝのはせ給たまひ、柔にやわ和わ忍にん辱じやくの御おん形かたちうつくしくわたらせ給たまへば、今いまひとしは有ありがたく覺おぼえて、かゝらんをがな、安あん置ちし奉たてまつらばやと思おもひつゝ、拜をがみ奉たてまつりける。左ひだりには夢む中ちゆう相さう傳でんのゑさく、右みぎには熊くま谷がやの木もく像ざうあり。顔かほ容ようかくこそはありつらめと思おもふまでたくましく、あらゝとぞ作つくりける。實じつにもかくあらけなきえびす心に、一ひとすぢに思おもひとりて、人ひとを濟さい度どせんの心こころおはしける事ことよと、つくゝとまばりて涙なみだおとしける。かの蓮れん生しょうは、ひろく衆しゆ生じやうを濟さい度どせんの心こころおはしける事ことよと、つくゝとまばりて涙なみだ深く誓ちかを立たてられしが、その願ねがひなしからずして、種くさく々ずの奇き瑞ずい顯げんはれて、終つひに上じやう品はん往わう生じやうをとげられしこと、誠まことにたのもしく覺おぼえて、其その誓ちかかならずあやまり給たまふな、後ご世ぜは一つうてなに迎むかへとり給たまへとふし拜をがみて、人々ひとびと、

おしなべてわたる誓のまことあればふかくぞ頼む我のちの世を  
たのむぞよはちすの花の上の露たてしちかひのむなしからぬを  
上もなきうてなの花にのりはえつ救ふかげにはなどか漏るべき

かく誰も／＼おなじすぢの事どもいふを、ものめかし出て書付くるこそかたはらいたけれ。さて立出て行く程に、深谷本庄などといふ里過ぎて、其夜は玉村といふ所になんとまりける。昨日にも似ぬいぶせき藁屋のうちなれば、とけても寝られざりけるに、有明の月の光はあけ行く空に見えまがへば、まだ夜ふかきに立出てけり。あくる田面に啼く雁のおのがこし路の山つゞき、かの在原の中將の「遠近人の」と口ずさみ給ひにし、淺間の嶽に立つ煙も、けふこそは見えわかず。夜はいとゞ明行ば、やぶしわかざる日の光、山もそれよと見渡さる。こゝは東照權現の宮居をしめ給ふなれば、今一入に詠めやりまゐらせて、關守とめぬ道ならば、まうでまほしう覺えける。さて惣社といふ所の光巖寺といふ寺の、いときよげなるに、晝のやすみして、方丈をみれば、佛壇正面には東照權現の御位牌ならびて、故相國の御位牌をする奉り、左右には金胎兩部の曼陀羅をかけ、御前の机には、法華經八軸あり。其外あかの具花さし色々並べ据ゑたるが、つゆのはこりもゐず、いとよくみがき飾りて、かくこそはあらまほしき事なれと、見るよりもきよげなり。思ひもかけず、御兩所の御位牌を拜み奉りぬると、ありがたくぞおぼえるに、此寺は秋元但馬といふ人の、近き程に建てられしとて、門前よりはじめ

ていづらに見所多くぞ有りける。又此寺中に八郎權現といふ御神の、まだ凡夫にておはしませしとき、兄君達にそねまれて、とちこめられさせ給ひし岩屋ありと人のいへば、見んとて行きけるに、年老いたる女の案内して「見せまゐらせん」とて、先に立て杉村のうちを、かくしるべせしもやさしきにて、物などとらすれば、悦びて歸りける。其後ある人のいふやう「人々はなにのをかしくて笑ひ給ひたり、聲のだみたればとて、申所は佛の御名にはあらずや。常に人のとなふる時、殊勝なり、ありがたしと宣ふは、さては稱名の事にはあらで、聲をたふとみ給ひつるにより、中々の事どもや」と教へきこゆれば、「げにもあやまれり。さりながら稱名の事はとかうに及ばず、かしら似げなくうちふりて、かたくなしく拍子とりしも、さては御覽じつるかたはらいしたしとは、つゆおぼさゞりしとのたまへし」ときこゆれば、言葉なげて笑ひつゝぞ立退きける。さて惣社を立出て行く程に、水澤といふ所になりぬ。これに觀音たゝせ給ひて、山水のながれも殊におもしろければ、休み居て眺めけるに、山は御堂の軒をきしり、白雲山の腰をめぐりて、草苅る童どもは、たゞ雲の中をなん行通ひける。雲行客の跡を埋むとは、かやうの事ならんと、めづらかにてながめつゝ、

しらくもに見えみ見えすみ水澤の山路こえゆく遠のさとびと

御前に参りて見たてまつれば、中尊は如意輪觀音にてわたらせ給ふ。左には地藏、右に夜叉明王、御後の方には千手、今一方には十一面たゝせ給ふ。この堂は孝謙天皇の御宇に、高光中將といひし人、上

野の國司にておはしけるが、その菩提所とかや。かの高光卿は本地薬師如來にてわたらせ給ふ故に、諸病悉除のため、伊香保の里の瀧の湯は出させ給ふとなり。さてこそかの瀧の上に薬師たゝせ給ふなれ。北の御方伊香保の姫と申せしは、則觀音の再誕にてわたらせ給ふと、くはしく縁起に見えたり。これはのち伊香保のやどにて見侍りしなり。さて是より伊香保までは皆山路なりけるが、色々の花武藏野にやゝたちまさりて、あやしの賤が軒端までも、花にてふきわたして、垣根も野邊も萩の錦をさらしたれば、げにおもしろき限りなりかし。宮城野もいかでかくまではと見えたり。人も心やありけん、しばし輿ども立てみせ侍りけるに、或人きこゆるやう「かくたぐひなき花の侍ると、人などか申傳へざりしぞや。あはれ御歸まで散らで侍れかし」とて、

散りのこれいかほの野邊のはぎが花また歸るさの忘れがたみに、

蘭のなつかしく匂ひくれば、

かぎりありてしをればつとも藤ばかり匂ひはとめよ秋の形見に

などかへすゝ契り置きける。下つけの花のおがときわすれ、おとらじがほに咲きつゝきければ、

いかなればおのが名におふ國こえてかみつに咲く下つけの花  
ちひさき童の、花を分けて遊びけるが、

たちそひて尾花が袖はまねくともちるないかほのあき萩のはな

おなじ文字こそさしあひたれ、をさなき者にはやさしくこそ。伊香保の里にもなりければ、それをしらする瀧の音おどろ／＼しうひきて、やどるべき家のかたは、柴の庵の世にもあやしきが、一むらついき見えたり。所ならはしにや、家のうへには秋の野にひとしく、すゝきむぐら生ひたり。かゝる所には、いかで一日もくらしなむとおぼえしが、入りて見れば、おもひつるにかはりて、座敷あるべかしくすまひて、深き谷へ造りかけたる程に、柴垣をかしげにしなしたるさまなど、いと心ありげなり。庭には石を疊み、岩根につくふかみ草をうる、軒端にかゝりをかしき松をうつし、籬にはおのづからなる竹の林、まどほに植ゑなして、竹のひま／＼に山見えて、下には細谷川流れたり。詠むるまゝに、うるさかりし心はうせて、心あらん人にだに見せまほしくぞ覺えける。彼瀧の上にたゞせ給ふ薬師は、ゆの本地にてわたらせ給へば、誰も参るよし聞きて、ある晝つ方しのびて参りけるに、らるそうしてし出て、御あかしかゝげ、御帳あげて、心經普門品などいと尊くよみ終りて、やがて歸りければ、人々輿よりおり、御前拜みなどしてながむれば、山には色々の花さき亂れ、右の方は谷深く、うしろに二つ嶽、むかうにをのこ山子持山、若楓のもみづまでといへるも、此山のことにこそといとをかし。今一方に赤城山さかひ澤といふ山々つゝき立ちたり。つねに見る山なれども、所からまさりて、麓の里も山田の原も、今一きはおもしろうぞ見たされける。薬師堂の口のかたには湯泉たゞせ給ふ。坂の下に阿彌陀堂おはします。湯泉の別當は則寺號湯泉寺とて、やがて引つゝき寺あり。此別

當には老たる母ありけるが、すゝけたる綿かづき、ふるめかしき衣ども重ね着て、袂に手引入れ、おなめきはづかしげなるものから、さすがにより來て、よしばみたる口つきして、物いひたるこそをかしかりつれ。藥師堂の別當はいはよしとて、坂より下に寺の軒見えけるが、其きは湯のながれる所ありて、それより寛をかけ渡し、町中へとりけるとぞ、人々語りける。ある夕ぐれ雨降りつれづれなる折から、あるじが方より人々の許へいひおこしけるは、「今日は空くもり御淋しくやおはしますらん。これは珍しからねども、わたくしの御慰に御覽ぜよ」とて、古今・新古今・勅撰の名歌などおこせければ、かゝる山賤も心はありけり。やさしのことやと感じける。其後の草紙どもをかへすとて、「もしも源氏そのほか歌抄杯あらば少し見せよ」といひやりければ、かの使行きて亭主を尋ねれども居ざりければ、うちの男にしかくのよしいへば、聞もあへず、「何ふいてうとや、げんしやうとや、をかしの名どもや」とて、少時わらひ入りて、「さて夫は人の名か、又はいれもの道具のたぐひにて候か、ほうしの名にこそ、いづくにてか聞たるやうには覺ゆれ。亭主きかるゝまでもなく、左様のものは是にはなしと申されよ。かせの事は内儀へこそ申さめ」とて、それゝといへば、内の下女走り出て、「いつも見ながら、今めかしのいひごとや、こゝにてははしへにのみすれば、なしとはなどやいはれぬぞ。誠にかせといふものは見たる事だになきものを」とてつぶやきける。折ふし亭主歸り來て、「にくきやつばらが、いやしきものゝ申なしや、そこ立退け」と怒りつゝ、頓て居直りかしこまりて、「三